

菟原処女伝説をめぐる一考察

大阪芸術大学 文芸学科 教授 龍本那津子

菟原処女伝説は、「処女塚型妻争い伝説」と言われるものの典型的な例である。その話形として複数の男子に求婚された女性が、その中の一人を選ぶことをせず、男子の争いの原因となった我が身を悲しんで自殺するという筋書きを持つものである。

この伝説の舞台である「菟原」は摂津国の古郡名。『万葉集』では宇奈比とあり海辺の意と思われる。(『和名抄』以後「宇波良」と読む。明治29年(1896)兵庫県武庫郡に合併後廃止。うばら。)現在の芦屋市から、神戸市中央区の生田川あたりまでが菟原郡にあたる。畿内と九州を結ぶ山陽道がそのすそ野を通る交通の要衝であった。

処女塚古墳(兵庫県神戸市東灘区)は、二人の男子に求婚されて自殺した菟原娘子の墓と伝えられる。また西求女塚古墳(兵庫県神戸市灘区都通)は求婚者菟原壮士の墓と伝えられ、東求女塚古墳(神戸市東灘区住吉宮町一丁目)は求婚者智奴壮士の墓と伝えられる。

「万葉集」においては、田辺福麻呂・高橋虫麻呂・大伴家持の3人の歌人によって歌われており、その特徴は以下の通りである。

田辺福麻呂の歌(巻9・1801~1804)は題名に「芦屋処女の墓を過ぎる時に作る歌」とあるように、娘子の墓に望んでの印象が中心で、伝説の内容よりも娘子の墓に寄せる人々の関心と娘子の行為に対する感動が詠まれている。高橋虫麻呂の歌(巻9・1809~1811)は、「菟原処女の墓を見る歌」と題してはいるが、伝説の内容を述べるのが中心で、智奴壮士と菟原壮士とが菟原処女を争う様子と間に挟まれた処女が窮して死を決意する経過が、人物の具体的な行動や言葉を通して生き生きと詠われている。大伴家持の歌(巻19・4211~4212)は、「処女の墓の歌に追同する一首 併せて短歌」と題し、また「興に依り」作ったと注記があることから、家持自身は処女らの墓を見た経験は無く、田辺福麻呂、高橋虫麻呂の歌に触発されて詠んだものと考えられる。臨場感には乏しいが、男たちの妻争いが原因で若くして自殺した娘子への一首の中心を占める。

菟原処女伝説は、平安時代の「大和物語」の「生田川」(第147段)に受けつがれる。物語は三部構成で、第1部では、一人の女をめぐり、二人の男が求婚し、女はいずれとも去就を決し得ず、思い悩んだ末、「すみわびぬ わが身投げてむ津の国の 生田の川は名のみなりけり」という歌を詠み、生田川に身を投げて死に、二人の男もその後を追ったという話を伝え、現在もあるという三つの墓の由来を述べる。第2部では、宇多天皇皇后の温子のサロンの女性たちが生田川伝説を描いた絵を見ながら、伝説の登場人物に代わって十首の歌を詠み合ったことが述べられる。第3部では、塚に葬られた男たちの死後の血なまぐさい闘争とその決着についての、旅人の話を語る。

【第1部】と『万葉集』伝説との相違点は、以下の通りである。

(1) 舞台が生田川となり、女の歌が挿入されている。

- (2) 人名の表記に関して、菟原壮士・智奴壮士の表記が消え、菟原・智奴は「姓」とされている。また、菟原処女ではなく、単に「女」となっている。
- (3) 女の親が、男たちに難題を出し、婿選びをしようとする。
- (4) 三人の死後、男たちの親が登場し、墓を造ることについての争いが起こる。

ここで重要なのは(2)(3)である。ヒロインの名前が消えて単に「女」としか記されない事に関して、関口裕子氏は「女性の地位の低下と関係する」と考える。また、婿選びの主体が本人ではなく親となっていることについても関口氏は「結婚決定権の、十世紀前後を画期とする、女性本人から女性の親(特に父親)への移行」と見ている(『処女墓(おとめづか)伝説歌考—複数の夫をもった美女の悲劇—』関口裕子 吉川弘文館 1996年)。

「万葉集」には無い【第3部】が付け加えられたことに関しては、万葉の求婚説話が恋する男女の心情への同情が中心となっているのに対して、「大和物語」においては男たちの闘争心に興味の関心の中心があったと考えられる。

なお、菟原処女伝説は「源氏物語」の「浮舟」の巻にも引用されており、この時代に広く世に知られていたものであったことがわかる。

さて、菟原処女伝説が大きな変容を見せるのは中世である。観阿弥の謡曲「求塚」は「万葉集」「大和物語」を本説とする。津の国の生田の里に来た旅僧が求塚を訪ねて、土地の女から塚の由来を聞いた後、夜亡魂を吊っている菟原処女の亡霊が現れ、2人の男を苦しめた上に死に至らしめた報いとして地獄で苦しんでいる様子を語るという話になっている。娘子が入水し、その後男たちが刺し違えて死んだところまでは、「大和物語」にほぼ依っているが、娘子の亡霊が現れ罪の報いとして地獄で責め苦にあっているところを語らせている点が本説とした「万葉集」や「大和物語」と大きく異なっている。ここにおいて新たに付け加えられたヒロインの「墮地獄」について、中世の仏教思想(女人罪障説)の影響が見られるが、小谷野敦氏はさらに「彼女自身は何もしていないのに、男の中に愛欲の念を引き起こしてしまった罪がひとり女に向けられるというのは、この時代の「女」に対する思想的付置を浮き彫りにしていると言えるだろう。」(『定本〈男の恋〉の文学史』勉誠出版 2017)と述べる。落魄した小野小町の伝説も見られるように、〈男の恋に応えない女〉は徹底的に痛めつけられる。ここに中世における女性観が垣間見える。

以上のように、菟原処女伝説の変容の背景には女性の社会的地位の変化を見ることができるといえる。また各時代における〈女性観〉〈ジェンダー〉を考える手がかりともなるのである。